

16
125
96

萬葉集古義

十五下

萬葉集古義

十卷

館書圖京東

一 二 五 冊	九 六 號	一 六 架	一 六 函	類	門
------------------	-------------	-------------	-------------	---	---

2091/24

萬葉集古義十五卷之下



竹敷浦船泊之時各陳心緒

ウラニフ子ハテシトキオノモクムテオモヒラ

土佐國 藤原雅澄撰



作歌十八首

ヲマリヤツ

竹敷浦ハ續後紀十三小兼和十年八月戊寅太宰府言對馬島上縣郡竹敷崎防人等申云と有り○船字類聚

抄よハ船

と作り

萬葉集古義十五下

安之比奇能山下比可流毛美
 知葉能知里能麻河比波計布
 仁聞安留香母。

山下比可流ハ六卷四十四丁小鶯乃來鳴春部者巖者山下
 耀錦成花咲乎呼里とある小同く下ハ上下の下小
 ハあらず赤紅き形をいふ辭なり二卷四十丁小秋山下
 部留妹十卷五十丁小金山舌日下三卷十九丁小山下赤乃

曾保船古事記小秋山之下氷壯夫など見えさる下小
 同く詞花集小タされバ何のいそむ○知里能麻河
 比ハ二卷廿丁小大舟之渡乃山之黄葉乃散之亂爾妹袖
 清爾毛不見と見ゆ五卷十七丁小烏梅能波奈知利麻加
 比多流乎加肥爾波十七丁三丁小乎布能佐岐波奈知利
 麻我比ともよめり○歌意ハ山小赤紅く光る黄葉の
 彼方此方散飛亂れまのふ盛ハ今日此項小
 ても何る哉さても見事のけーきやとなり

右一首大使

多可之伎能。母美知乎見禮婆。
和藝毛故我麻多牟等伊比之。
等伎曾伎爾家流。

歌意かくれと

るすぢな

ヒトウタハツカヒノスケ

右一首副使

副使ハ大伴宿禰三中な

り傳三卷下ふ委云り

多可思吉能。字良未能毛美知。
和禮由伎豆可敝里久流末低。
知里許須奈由米。

未字舊本末ふ誤れり。今改つ。○末字舊本末ふ誤れり。
今改つ。○知里許須奈由米ハゆめく散ることなれ

といふが如し。黄葉オホ小令オホする謂なり。八卷三十一小吾念ワガモト
 妹爾直一眼令觀イモニタヒトメミセム麻而爾波落許須奈由米登云管○歌
 意ハ竹敷の浦廻の黄葉よ。吾新羅國小行至りて。事竟
 りて此處小歸り來るまでゆめく散失る事ありれ
 よと

なり

ミギノヒトウタハオホキマツリゴトヒト

右一首大判官

多タカ可思吉能。宇ウ敝可多山者。久ク

禮レ柰ナ爲能也。之シ保能伊呂爾柰ナ

里リ爾家流香聞モ

宇敝可多山ハ上方山ウヘカタよて上つ方ウヘ小ある山をいふべ
 し。又即山名小負ウヘカタとる小もあるべし。○也ヤ之保能伊呂
 ハ彌入之色ヤシホノイロなり。十一廿四小吳藍ウナヒノ之八塩ヤシホノ乃衣十九
 丁小紅ウナヒノ之八塩ヤシホノ爾ニ染而於已勢多流服之欄毛ウナヒノ○歌意加
 くれとる

すぢあし

右一首少判官

少判官 少字、舊本小ハ、正七位上大藏忌
寸麻呂なり、續紀不見えて、上小引り

毛美知婆能。知良布山邊由許。

具布禰能。爾保比爾米但豆伊。

但豆伎爾家里。

知良布山邊由ハ。知良布トハ。知流の伸りこる小て、その伸云謂ハ上小理りこる如く、山邊由ハ山邊をとといふよ同ト山のはとりの海を漕なり。○歌意ハ、黄葉の散飛つ、けをいよき山のほとりの海を漕、船の艤の艶色小愛て、娘子の自出来よけりとあり

多可思吉能。多麻毛奈婢可之。

已藝低奈牟。君我美布禰乎伊。

都等可麻多牟。

多麻毛奈婢可之ハ玉藻を令靡なり○歌意ハ竹敷浦の玉藻を靡の一漕出て新羅へこり往む君の御舟の此處小歸り來まさむ程といつと思ひての待居むとなり

右二首對馬娘子名玉槻

對馬娘子ハ播磨娘子常陸娘子などいへる類なり此ハ遊女の類なるべし

多麻之家流伎欲吉柰藝佐乎。
之保美豆婆安可受和禮由久。
可反流左爾見牟。

多麻之家流ハ玉敷有なり明なる沙のつどへるを云り○可反流左ハ還る時なり既く具云り○歌意ハ玉敷する清き激のおもろければ未見あぬふ潮の浦來て船小乗べき時小なりされば心ならずそこを

見捨て立別れゆくをいざ
又還る時小委見むとなり

右一首大使

安伎也麻能毛美知乎可射之
和我乎禮婆宇良之保美知久
伊麻太安可奈久爾

也麻類聚抄小ハ山と作り○宇良之保美知久宇良之抄よハ浦は浦潮満來なり○歌意ハ秋山の黄葉を折塩と作り。挿頭ておもゝるき敵を見つ、興ト居る小浦潮が満來て、船小乗べき時よなりこれバいまど飽ぬ事なる
小心ならず見さして別れ
行の口惜しき事となり

右一首副使

毛能毛布等比等爾波美要緇

之多婢毛能思多由故布流爾。

都奇曾倍爾家流。

比等類聚抄よハ人と作り○之多婢毛能ハ下をいはむ料よ云る枕詞なり○都奇類聚抄よハ月と作り○歌意ハいのみ思ひハすとも大丈夫なればのゝゝく物思をするといふけしきを人目よは見られどと心づよく思ふものゝらをや裏小戀しく思ふ中ウチ小數月を經よければ裏よ隱カクレふよ堪タカぐかと思へどそれと人

の知べく色小出てつひよ表ウラふあらハハハせどとあり三四五一二三句を次第て聞クべし四卷三十三物念モノモト跡人爾不見常奈麻強トヒトニミエジトナマシ常念弊利有曾金鶴ツチニオモヘドアリソナカチツル右一首大使ミギノヒトウタハツカヒノカミ

伊敞豆刀爾可比乎比里布等。
於伎敞欲里與世久流奈美爾。

許^コ呂^ロ毛^モ豆^テ奴^ヌ禮^レ奴^ヌ。

可比乎比里布等ハ、貝を拾ふとしてこ

なり○歌意かくれざるすぢなり

之^シ保^ホ非^ヒ柰^ナ波^バ麻^マ多^タ母^モ和^ワ禮^レ許^コ牟^ム。

伊^イ射^ザ遊^ユ賀^カ武^ム於^オ伎^キ都^ツ志^シ保^ホ佐^サ爲^ヰ。

多^タ可^カ久^ク多^タ知^チ伎^キ奴^ヌ。

之^シ保^ホ佐^サ爲^ヰハ、潮の満來て、さこ〜と鳴動く時を云、一

卷三、卷十一、卷など小見えて、既く一、卷中六十九小具、云

り○歌意ハ此、清き激チキのおも〜ろくて見る小あらず

ハあれども、潮の高く興來て、船出すべき時小至りぬ

れば、心ならずともいざ〜此處を立別れて行む潮

涸小なりあバ、又も歸り來て、此おも〜ろき激よ、吾ハ

遊むむそとなり、四五三一

二と句を次第て聞べ〜

和^ワ我^ガ袖^ソ波^ハ多^タ毛^モ登^ト等^ト保^ホ里^リ豆^テ奴^ヌ。

禮^レ奴^ヌ等^ト母^モ故^コ非^ヒ和^ワ須^ス禮^レ我^ガ比^ヒ等^ト

良^ラ受^ズ波^ハ由^ユ可^カ自^ジ

本句は我袖ハ手本まで徹りて沾ぬともといふなり。そもそも蕪豆と多母登との差別を委細に云時ハ蕪豆ハ衣手小て左右手を指入る所の惣名多母登ハ手本小て衣手の本方臂より肩までの間をいふなり。四十九小吉西斯伎奴多母登乃久太利麻欲比伎爾家利とあるも袖の本方の行なりされば集中多母登と

云ハ多手本と書リ。ニ卷廿一丁。三卷五十丁。五十九丁。三十八丁。十卷五十一丁。六十丁。十一。十七丁。十二。五丁。九丁。十四丁。十九。三十四丁。などよああり。後、袂字を夕モト小當るもその意の。和名抄云。釋名云。開張以臂屈伸也。袂其中虚也。和名曾天とあり。さて今俗小袖ハ惣名小て夕モト小對へいふときハ手をとほすところをソテといひ袖のくだりの底の方を。知モトと云りところろえさるハいあること小あり。むろ。故非類聚抄小ハ戀と作り。歌意ハ吾袖ハ縦い本方まで徹りて潮小沾べくともよ。いとを。家妻を戀しく思ふ心の苦しく堪がさき小依て身小着れば即その苦き思いを忘るといふなる志貝を拾撿ずしてハ行やらじとなり

奴婆多麻能伊毛我保須倍久。

安良奈久爾和我許呂母豆乎。

奴禮豆伊可爾勢牟。

奴婆多麻能 婆字舊本不波とハ夜といふ一つづけを
作リ類聚抄不從ハ夜といふ一つづけを
れさる枕詞よてさてそれより轉りて寐といふ意よ
伊の一言よ妹といふよつづけさりともしふべけれ
どおはつあな。本居氏是ハ十一卷おぬむ玉の妹の
黒髮云々と有歌などを心得るがへ

て誤てよめるなるべしかよるくみ妹とつづけき
よしなりといへり然れども後人ならバこそ阿れ寧
樂人のさまで意得るがへて故考るふ此ハもと志岐
誤らむこととも思えれず多閑能などありけむと後よ心意さるるより字

とも寫し誤りさるよもあらむの五卷十一小志岐多
閑乃麻久良と見えさりさて敷妙之とて袖とも手本
とも衣手とも集中往々つづけよみされバ今の歌も
第二三句を隔て第四句の許呂毛豆といふ一かゝれ
る詞なるべきの○歌意ハ焱り干べき妻も副いてあ
らぬ事なるをかやうし潮お沾て

吾衣手をいのおのせむとなり

毛^モ美^ミ知^チ婆^バ波^ハ。伊^イ麻^マ波^ハ宇^ウ都^ツ呂^ロ布^フ。
和^ワ伎^ギ毛^モ故^コ我^ガ。麻^マ多^タ牟^ム等^ト伊^イ比^ヒ之^シ。
等^ト伎^キ能^ノ倍^ベ由^ユ氣^ケ婆^バ。

宇都呂布ハ落散と云リ○歌意ハ秋小なり必歸
リ來給へ吾待つ、居むと妹の云ふありくして今
ハ在やその時よ至りぬれば妹と共に見をやすべき
黄葉ハ散失行と吾ハ未歸事を得ずして空しく妹

を待のむと思ふが。

深く口をいじなり

安^ア伎^キ佐^サ禮^レ婆^バ故^コ非^ヒ之^シ美^ミ伊^イ母^モ乎^ヲ。
伊^イ米^メ爾^ニ太^ダ爾^ニ比^ヒ左^サ之^シ久^ク見^ミ牟^ム乎^ヲ。
安^ア氣^ケ爾^ニ家^ケ流^ル香^カ聞^モ。

故非之美ハ戀しき故よの意なり○歌意ハ秋小なり
なバ必歸り來て相見むと期り故よいと妹の戀

しく思ハるれども、歸る事を得ざれば、相見ることな
らず。されば夢となりとも、久しく相見むと思へど、心
だらひよ見る事も得せず。夜
明よける哉。さても残多やとなり

比等里能未。伎奴流許呂毛能。

比毛等加婆。多禮可毛由波牟。

伊敞杼保久之豆。

伊敞類聚抄。小ハ家と作り。○歌意ハも。吾衣の紐解
バ。家遠く放り來て妻もなければ。誰ありて。其紐を
結ぶべき。さればとひ吾衣の紐の緩ぶとも。獨のみ
ハ解事をせしとなり。古夫の紐をバ。其妻ならでハ解

結せぬことなれば。かくよめり。四卷十七。小獨宿而絶

西紐緒忌見跡。世武爲便不知哭耳之。曾泣九卷廿。小吾

妹兒之結手師。紐乎將解八方。絶者絶十方。直二相左右

二十一十一。小管根。惻隱君結爲我紐緒。解人。不有十二

九。小二爲而結之。紐乎一爲而吾者解不見。直相及者。又

十二。海石榴市之八十衢爾立平之。結紐乎解卷。惜毛世

卷十九ナガツキ小海原ウチノハラ宇等ウツト保久ホク和多里タタリ豆等マメト之布等シノフト母兒モコ良我ラガ
牟須ムス敵流セキリウ比毛ヒモ等久トクナ奈由米ナユメなどよめるを思合オモヒアヒべー

安麻久毛能多由多比久禮婆アママクモノノタユタヒクレバ

九月能毛美知能山毛宇都呂ナガツキノモミチノヤマモウツロ

比爾家里ヒニケリ

安麻久毛能ハ枕詞アママクモノノなり十二セー小天雲アマクモノノクモ乃絶多比安ナクヒヤキ
心有者ココアラバとよめり○多由多比久禮婆タユタヒクレバハ猶豫ウヤウヤして來れ

ハの意イあり○毛美知能山毛モミチノヤマモハ山の黄葉ヤマノキハジもと云むの
ごとし契冲云第十九セキウクニ小紅葉コカキの山とよめりともハ
名所ナカよあらず第十第十七ジュウジュウシチ小知花山コチハナヤマとよめるハ只外
花のさける山ハナノサケルヤマなりそれハ准スミじてあるべー○歌意ウタノイハ
彼方カノカタよ留まり此方ココノカタよやすらひなどして進々スグクとも得
行イやらず猶豫ウヤウヤして來れば九月クニの山の黄葉ヤマノキハジも盛過シメタて
早散失ハヤシラシふけ
りとなり

多婢爾豆毛母奈久波也許登タビニテモモナクハヤコト

和伎毛故我牟須比思比毛波。

柰禮爾家流香聞。

多婢類聚抄よハ旅と作り○母奈久波夜許登ハ凶夏
あいて早還來よとなり母ハ上小云り○比毛類聚抄
小ハ紐と作り○柰禮ハ褻なり○歌意ハ旅小ても凶
事なく平安座して早く歸り來給へと云て妹が結び
一吾衣の紐ハ褻垢きよける哉これみて思へバ早月
日久くになりこるよ未歸る事を得ざればさてもい

よいよ戀しく思え
るゝ事そとなり

回來筑紫海路入京到播磨

國家島之時作歌五首

回字古寫本よハ廻拾穗本よハ還
と作り○家島ハ既く此上小出ッ

伊敞之麻波柰爾許曾安里家

禮^レ宇^ウ奈^ナ波^ハ良^ラ乎^ヲ。安^ア我^ガ古^コ非^ヒ伎^キ都^ツ
流^ル伊^イ毛^モ母^ト安^ア良^ラ柰^ナ久^ク爾^ニ。

歌意ハ家島と云ハ家の妹も在ベキ小海原を遙々吾
戀〜思ひて渡り來つる事なるを妹もなけれバ家
島と云ハ唯島の名をのり

よてこそありけれとなり

久^ク左^サ麻^マ久^ク良^ラ多^タ婢^ビ爾^ニ比^ヒ左^サ之^シ久^ク。

安^ア良^ラ米^メ也^ヤ等^ト伊^イ毛^モ爾^ニ伊^イ比^ヒ之^シ乎^ヲ。
等^ト之^シ能^ノ倍^ヘ奴^ヌ良^ラ久^ク。

歌意ハ旅中久〜くあらむやハ秋に至らバ早歸り
來むと堅〜妹よ云期^キりて別れ來〜を早く歸る事を
得ず〜てをや一年を經度りぬる事よとなり天平八
年四月小拜朝^{ミカドヲカミ}小發て九年正月小京^{ミヤコ}小入り〜趣かれ
ハ年の經ぬると
ハいへるなり

和伎毛故乎。由伎豆波也。美武。
安波治之麻久毛爲爾見延奴。
伊敝都久良之母。

延舊本延小誤れり。今改つ。○伊敝都久ハ契冲云。秋小
いとり附を。秋附といふごとく。家小附なり。○歌意ハ
近く見し淡路島也。や、遠く跡小なりて。雲居遙小見
えぬれば。今ハ家の方小近附らし。をやく行て妹小相

見む。さてもりれしやとなり。三

四五一二と句を次第て聞べし

奴婆多麻能欲安可之母布禰
波許藝由可奈美都能波麻末
都麻知故非奴良武。

美都能波麻末都ハ待を云む料小。家小近き處を。取出
て云るなり。一卷 廿六 小。去來子等早日本邊大伴乃御

津乃濱松待戀奴良武とある小同ド○歌意ハ夜中
も船を留めず夜を明していでく急く船を漕行む
妹の吾を戀しく思ひて今のくこと待つ居らむ其
を思へば志だもやすらふべき小非ずとなり

大伴乃美津能等麻里爾布禰

波豆豆多都多能山乎伊都可

故延伊加武

美津能等麻里ハ難波の御津の泊なり住吉の御津と
のら御津の濱とも三津の埼とも御津の松原とも多
くよめる其地なり○故延伊加武ハ將超往なり往を
伊久と云ること古よも例多し十四丁五伊豆安禮
波伊可奈又三丁於伎豆伊可婆十七丁五小於吉底伊
加婆乎思又四丁於伎底伊加婆乎思廿卷八小佐之
豆伊久和例波などあり又十卷四丁小妹許跡馬鞍置
射駒山十七丁十九小伊毛我伊弊爾伊久理能母里乃な
どもあり類聚國史廿二桓武天皇御歌小氣佐能阿狹
氣奈久知布之賀農曾乃已惠遠岐嘉受波伊賀之與波

布氣奴止毛古今集離別人やりの道ならむく小大
のさへいきりくと云て率歸りなむ羈旅詞書小東の
方へ友とする人ひとりふさりいざなひていきけり。
伊勢物語人のいきのよふべき所おもあらず云々。
京よありこびて東よいきけるよ云々など何り○歌
意へいつしの御津の傳り船泊てさて陸ふ上りて立
田の山を超往て家小還り着む
ことそといそがれ思ふなり

ナカトミノアツミヤカモリガアヒテクラベノメニヨハル
中臣朝臣宅守娶藏部女嫂

サヌノチカミヲトメヲトキミトリミテサガメテナガス
狭野茅上娘子之時勅斷流

ツミニ公子玉リコシノミチククククニ
罪配越前國也於是夫婦相

キヤスクワカレガタキヲアヒオノモクノミテカシモノコロヲオクリコタフル
嘆易別難會各陳慟情贈答

ウタムソチマリミツ
歌六十三首。

此題詞舊本よハ中臣朝臣宅守與狹野茅上娘子贈答
歌とのみ記せり今ハ目錄よ從つ○宅守ハ續紀小天

平十二年六月庚午宜大赦天下自天平十二年六月十
五日戊時以前大辟以下咸赦除之云々其流入穗積朝
臣老等五人召令入京云々中臣宅守不在赦限此度ハ
らずして此後ハ赦され天平寶字七年正月壬子從六
て京ハ入らざるべし位上中臣朝臣宅守授從五位下と見えしり○藏部女
ハ傳未詳ならず○狹野茅上娘子ハ傳未詳ならず官
女なりけるなるべし○配越前國ハ續紀ハ神龜元年
三月癸未定諸流配遠近之程云々越前安藝爲近と見
えされバ近流なり宅守の流配れハナク一年
月ハ紀中ハ見えず漏こるなるべし

安之ア比シ奇ヒ能キ夜ノ麻ヤ治マ古ヂ延コ牟コ等エ。
須ス流ル君キ乎ミ許コ許ロ呂ニ爾モ毛チ知テ豆ヤ夜ヤ。
須ス家ケ久ク母モ奈ナ之シ。

治舊本治小誤○歌意ハ山路を超て遠く越國ハ別去
座むとする君の事を心小持て悲しく思へバ安き事
のある間も吾
ハなるとなり

君我由久道乃奈我氏乎久里
多多彌也伎保呂煩散牟安米
能火毛我母。

クリタミ彌字舊本よハ彌と作ハ繰疊なり○歌意
久里多多彌今ハ類聚抄よ從
ハ君の行賜ふ長道を繰寄疊みて混一ヒトツして焼亡ば
して近くならぬむ天の神
火もがふあれのとなり

和我世故之氣太之麻可良婆。
思漏多倍乃蘇低乎布良左禰。
見都追志努波牟。

ケダシマカラバ若も罷らバといふの如し○蘇低
氣太之麻可良婆ハ若も罷らバといふの如し○蘇低
類聚抄よハ袖と作り○歌意ハ勅命なれば辭む事も
叶をずして若も越國よ罷賜ふとならば長き道の間
袖を擧て吾を招きて行賜へ其をぶ見つハ君を慕

をむそ

となり

己能許呂波古非都追母安良

牟多麻久之氣安氣豆乎知欲

利須辨柰可流倍志

安氣豆乎知欲利ハ夜明て後よりといをむの如し乎
知ハ彼よてあちと云よ同じ貫之歌小昨日より乎知

をバ知ずとよめるハ過去一かを云今ハ未來を云

れど乎知の言ハ同じ貞觀儀式十二月大饗儀小云々

與里乎知能所乎柰牟多知疫鬼之住加登定賜比行賜

豆云々とある乎知も同言なり○歌意ハ明日ハ相別

れなむと思へバ戀しくハ思えるれども猶別れぬ内

なれば頃者ハ戀情を堪忍いつゝもあるべきを明む

朝小別をして後よりハいのおせむ

すべなく悲しくあるべしとなり

ミギノヨウタハシテワカレトヲトメガカナシヨメルウタ

右四首臨別娘子悲嘆作歌

安乎爾與之。奈良能於保知波。
 由吉余家抒許能山道波由伎
 安之可里家利。

由吉余家抒吉字拾穂本ふハ行善キヨけれどなり。娘手の
 許へ通ひならしる大路なればの意なり。○許能山
 道波云々ハ越前の配所へおもむくなれば彌ま
 て行悪く思ふ意なり。○歌意かくれしるすぢあ

宇流波之等。安我毛布伊毛乎。
 於毛比都追。由氣婆可母等柰。
 由伎安思可流良武。

宇流波之等ハ十二エノ與愛我念妹又九愛等念吾妹
 乎などあり。○母等柰ハむさくし云むの如し。界
 解。此モトナノ詞と三の句の上へ廻し。○歌意ハ愛
 て心得べいと云るハさることなり。○歌意ハ愛
 と吾思妹を留置てむさくし戀し思ひつゝ行バ

やかやうよ山道の行悪くあるらむとあり。この上の
行悪のりけりと云るをみづのりことこるやうの意
な

加カ思シ故コ美ミ等ト能ノ良ラ受ズ安ア里リ思シ乎ヲ。

美ミ故コ之シ治ヂ能ノ多タ武ム氣ケ爾ニ多タ知チ互テ。

伊イ毛モ我ガ名ナ能ノ里リ都ツ。

第一二句ハ勅命をおされて妹のことを入よも告ず
有しをありと契沖云る如し。第三四句ハ御越道の
峠タムケ立タチ而テなり。御ミ吉ヨシ野ヌの御ミふフて。真マと云ふ同トじさ
てこれも契沖近江より塩津山を越て越前よ入山の
峠タムケなり。およそさる所をさうげといふはもと手向を
るべし。そこおて神さあふぬさ奉てつゝのあゝらむ
変をいのればなり。逢坂山をも第六ふハ手向山と云
り。此塩津山といふハ今木の芽峠と聞ゆるふや案内
知侍らねん。このひも侍らむ。此峠を越ればいとバ
さのひたるのふおほゆる故ふ得堪ずして妹の名を

いひ出るなりこ云り猶多牟氣ハ三卷丁廿四小佐保過
 而寧樂乃手祭爾置幣者十七四十丁刀奈美夜麻多牟氣
 能可味爾奴佐麻都里なども見えこり○歌意ハ勅命
 を恐れ慎みて妹の事を人ふも告ずて有しを越道の
 此峠の險しきふ得堪ずして思
 えず妹の名をいひ出つとなり

右四首中臣朝臣宅守上道

作歌

於毛布惠爾安布毛能奈良婆。
 之末思久毛伊母我目可禮互。
 安禮乎良米也母。

於毛布惠爾ハ今俗小思ふやりふ云々するといふハ
 この於毛布惠爾の詞の轉りたるものからむの思ふ
 まよと云むの如し岡部氏の惠ハ故あり思ふあら
 畧きて惠と云如きこと古言よさらはあ○歌意ハ思
 ることなり余の雅言成漢を見て知べし

ふまゝ、ふ逢物よてあらば、志ばりの間も、妹よ離れて
居むやい思ふまゝ、よ逢といふことのならぬものな
ればこそ、かく妹よ離遠ざ
ありて、いあるなれとなり

安可アカ彌ミ佐須サス比流ヒル波毛ハモ能母ノモ比ヒ。
奴婆多麻乃ヌバタマノ。欲流ヨル波須ハス我良爾ガラニ。
彌能未之柰加由ミノミシナカユ。

彌能未之柰加由ハ之トハ其一すぢなるを重く思を
する辭よて、一すぢ小哭よのみ所泣といふなり。○歌
意かくれ。

るすぢを

和伎毛故我ワギモコガ可多美能許呂母カタミノコロモ。
奈可里世婆ナカリセバ。奈爾毛能母氏ナニモノモテ加カ。
伊能知都我麻之イノチツガマシ。

可多美能許呂母許呂母類聚抄を娘子の形見よ贈れる衣なり○歌意ハ吾妹子の形見よ贈れる衣のあれ
る衣なり○歌意ハ吾妹子の形見よ贈れる衣のあれ
バこそせめての慰みよ其を見つゝ悲しきよ堪てあ
ることなれも此形見よ小なりせば何物をもて
の命を継まし悲しきよ堪ずして死なむより他なり
となり○今按小母氏加ハ母智加を後小寫誤れるも
のハあらざるのさるハ後世こそあれ古ハ母知と
母氏とハきをやのふこのれて自持よハ母知とのみ
いい他よ令持よハ母氏といひて一ツも混れること
なければなり一ツ卷小籠毛與美籠母乳十七小美許登

母知多知和可禮奈婆十八小夜保許毛知麻爲泥許之
廿卷小麻蕪塗毛知奈美太乎能其比など假字書よハ
みを母知とのみいひてこれらを母氏と云ることな
し後世よハ上件の意なるところをいづれも母氏と
のみいひさるハ自他を誤りて混一小いさるものな
り又古事記中卷歌小伊都都伊母知宇知豆斯夜麻
牟ま之岐許志母知表勢下卷歌小許久波母知宇知斯
於富泥ま之加微能美豆母知比久許登爾ま之多都基
母々々知豆許麻志母能など見えてこれらの様をる
こころを母氏といひさること一ツもあることなきこ

とさらなり。但し寧樂朝の季ハエつ方よりハ、やゝ混マシひ初
て、母知モチといふべきを、母氏モチといへることもありしよ
り。こゝおもかくいへるのとも云べけれど、續紀卅六
後紀十四、續後紀一、卷などの詔キキふ、清直心乎毛知モチま
續後紀同卷、天之日嗣乎アマノヒツギ戴荷知イタキモチなど、何るりへ、大日
本靈異記、小、喟、母知モチ阿曾比豆、字鏡アソビ、釜奈波乃波志爾
銅乎毛知アソビ、天加佐禮留曾カサレなど、何るを見れば、此、集のか
ぎりのみならずや、古くハ混マシれさることなありし
趣なれば、寧樂朝の歌よみなどの混マシれてさいふべき
謂ハ、さらふなきことなり。されば此ハ寫誤なるべき

のと思ふなり。あれよよりて猶思ふよ。古書ハ是以と
あるをも、コゝヲモテと訓ハ、後の漢籍讀の口クチづき
る癖よして、古人の然オレハいふべくもあらねバ、余ハそ
れをもコゝモチテと訓てとなり。コゝモチテといふ
ハ、いさゝの異様なるやう思ふ人もあるべけれど、
其ハ即後世の舊慣クセをのりとし、こる心より、志の思ふ
ことよて、古ハ許コト己思許モフコト己知シレなどやういへること
めづらしからねバ、決キめて古人ハ、後世人の訓ムハ、
おひしを知べし。十八よ、宇萬爾布都麻爾ウマンニフツマニ於保世母天
とあるハ、負セせ令持モタといへるよて、いれゆる他ヒトよ令セる

意の母天なれば自然する意の母知を混へて云ふ
ハ非ずこの持の事既く一巻云ふとこれと盡さざる
ころも有りければ煩へりけれど重
ねて具ふ云て驚かすおみなむ

トホキヤマセキモコエキヌイ
等保伎山世伎毛故要伎奴伊
マサラニアフベキヨシノナ
麻左良爾安布倍伎與之能奈
キガサブシサ
伎我佐夫之佐

世岐ハ礪波關なり○伊麻類聚抄よハ今と作り○佐
夫之ハ不樂不怜など書る字の意よて既く具云り注
ふ一云佐必之佐類聚抄よハ此注无○歌意ハ遠き山
のみならず礪波關とさへも超て來ぬれば今更妹よ
相見べき為方のなきのさぶく
りれハ一さいをむのさなりとなり

オモハズモマコトアリエム
於毛波受母麻許等安里衣牟
ヤサヌルヨノイメニモイモ
也左奴流欲能伊米爾毛伊母

我^ガ美^ミ延^{エン}射^ザ良^ラ奈^ナ久^ク爾^ニ。

於^オ毛^モ波^ハ受^ズ母^モハ。娘子^{メカ}の^コ事^トを^シ思^フを^ズ母^ノの^{コト}意^ニなり。○麻^マ
許^{コト}等^ト安^ア里^リ衣^エ傘^ム也^ヤハ。實^アよ^リ世^ニよ^リ有^テ得^ル堪^ムや^ハの^{コト}意^ニあ
り。七^シ卷^マ三^ミ十^{ジュウ}小^コ淡^{タン}海^{カイ}之^ノ哉^ヤ八^{ハチ}橋^{ハシ}乃^ノ小^コ竹^{チク}乎^カ不^ズ造^ス矢^ヤ而^{シテ}信^ニ有^リ
得^ル哉^ヤ戀^{コイ}敷^キ鬼^キ乎^カ○美^ミ延^{エン}射^ザ良^ラ奈^ナ久^ク爾^ニハ。見^ミえ^ズる^{コト}事^トなる
を^シと^シい^フ意^ニあ^ル詞^ノなり。此^ノ例^ニ一^ツ卷^マ三^ミ卷^マ四^シ卷^マ十^{ジュウ}四^シ卷^マ
等^トよ^リ見^ミえ^ズる^{コト}事^トなるを^シ妹^ノの^{コト}事^トを^シ思^フを^ズ母^ノの^{コト}意^ニあ^ル實^ニよ^リ有^テ
一^ツも^シ見^ミえ^ズる^{コト}事^トなるを^シ妹^ノの^{コト}事^トを^シ思^フを^ズ母^ノの^{コト}意^ニあ^ル實^ニよ^リ有^テ
て^シ得^ル堪^ムや^ハと^シなり。三^ミ四^シ五^イ一^{イツ}二^ニと^シ句^ヲを^シ次^ニ第^ニて^シ聞^クべ

等^ト保^ホ久^ク安^ア禮^レ婆^バ一^{ヒト}日^ヒ一^{ヒト}夜^ヨ毛^モ於^オ
母^モ波^ハ受^ズ豆^テ安^ア流^ル良^ラ牟^ム母^モ能^ノ等^ト於^オ
毛^モ保^ホ之^シ賣^メ須^ス奈^ナ。

歌^ノ意^ハ一^ツ日^ニ一^ツ夜^ニも^シ妹^ノの^{コト}事^トを^シ思^フハ^ハぬ^間と^シて^シハ^ハなき^も
の^ヲを^シ遠^ク隔^リて^シあ^レバ^ハ忘^レて^シ思^フを^ズ母^ノの^{コト}意^ニあ^ルら^む物

とゆめくおもほ

しめすあとなり

比等余里波伊毛曾母安之伎。

故非毛柰久安良末思毛能乎。

於毛波之米都追。

イモツモアシキ
伊毛曾母安之伎とハ曾母ハ十卷小吾待之秋者來奴
シモモハノチツモイサケル
雖然茅子之花曾毛未開家類十一小相見而者戀名草

六跡人者雖云見後爾曾毛戀益家類など何るを考合
するふかへりてと云意を輕く含くる辭ときこえ
りされバ他人よりハ善るべき理なるふかへりて他
人よりハ妹を惡きと云なるべし○歌意ハ戀しく思
ふこともなくて安らのおあらまゝものごとくもえあ
らずてかふのく吾ふ物をおもえしめつゝあるを
もへバ他人よりハのへりておよなく妹を惡しきも
のふてあるとなり契冲云第七小玉つ島見てしよ
けくもあれえなく都ふゆきてこひまゝ思へバこれ
名所と人と異れどもそしるやうふてはむるあら

あるはい

とつなり

於^オ毛^モ比^ヒ都^ツ追^ノ奴^ヌ禮^レ婆^バ可^カ毛^モ等^ト奈^ナ
奴^ヌ婆^バ多^タ麻^マ能^ノ比^ヒ等^ト欲^ヨ毛^モ意^オ知^チ受^ズ
伊^イ米^メ爾^ニ之^シ見^ミ由^ユ流^ル

歌意ハ思ひつゝ思ひ寐ふすればよや一夜も漏ずむ
さむさと夢ふ入來て妹のすぢらよ見ゆるならむと

なり毛等奈の言ハ尾句の上よりつゝて聞べし上七
下ふ和伎毛故我伊可爾於毛倍可以下今と全同ト歌

ありあ

可^カ久^ク婆^バ可^カ里^リ古^コ非^ヒ牟^ム等^ト可^カ禰^ニ豆^テ
之^シ良^ラ末^マ世^セ波^バ伊^イ毛^モ乎^ハ婆^バ美^ミ受^ズ曾^ソ
安^ア流^ル倍^ビ久^ク安^ア里^リ家^ケ留^ル

歌意ハかほと小戀しく思えれむものとかねて知らまゝのバをドめより妹をバ相見ずてあるべき物
 おてありけるをとなり十一四は是量戀物知者遠可
 見有物十二四ふ如是許將戀物其跡知者其夜者由多
 爾有益
 物乎

安米都知能可未奈伎毛能爾。
 安良婆許曾安我毛布伊毛爾。

安波受思仁世米。

歌意ハかくむのり命小懸て戀しく思へバさりとも
 天神地祇哀憐て恩頼を施してあハ一の給をむそ
 も一天神地祇のなき物よてあらまゝのバ吾思妹よ
 あえせずて死すべき事よてこをわれとなり四卷十三
 二ふ天地之神理無者社
 丁がモフキミニアハズシニセメ
 吾念君爾不相死爲目

伊能知乎之麻多久久之安良婆。

安里伎奴能。安里豆能知爾毛。

安波射良米也母。

伊能知乎之ハ之ハ其一すぢなるをいふ辭よて命を
の意なり○麻多久之安良婆ハこれハ上なると
同ノ意の辭よて全有者なり四卷三十小吾命之將全
幸限古事記倭建命御歌小伊能知能麻多祁牟比登波
○安里伎奴能ハ有而といえむ料なり安里伎奴ハ十
四十六よもあり古事記小見ゆ既く四卷十五よ珠

衣乃狭藍左謂沉云々の歌おつきて具云つ○安里豆
能知爾毛ハ有々て後ふもの意なり注小一云安里豆
能乃知毛○歌意ハ一すぢふ平安くあれのと思ふ
吾命さへ全幸くてあるならバ有々て後ふも逢事な
くてハさりとハよ

もあらトとなり

安波牟日乎其日等之良受等

許也未爾伊豆禮能日麻豆安

禮古非乎良牟。

等許也未ハ神代紀天石屋段小六合之内常闇而不知
 晝夜之相代古事記小爾高天原皆暗葦原中國悉闇因
 此而常夜往神功皇后紀小晝暗如夜已經他日時人曰
 常夜行之也此集二卷五丁小天雲乎日之目毛不令見
 常闇爾覆賜而などあり常闇常夜同イ意なりこゝハ
 四卷五丁小照日乎闇爾見成而哭淚云々とある心を
 えなり○歌意ハ其日ハ逢むといふ事とも知ず照日
 をも常闇小泣くらゝまどいていづれの日まで吾戀

〜〜思いつゝ居

む事そとあり

多婢等伊倍婆許等爾曾夜須
 伎須久奈久毛伊母爾戀都都
 須敝奈家奈久爾。

多妣等伊倍婆ハ廿卷一丁防人歌小多妣等敝等麻多
 妣爾奈理奴云々とあり○許等爾曾夜須伎ハ言の端

おかけていふよはいとこの易きよなり。○須久奈
 久毛ハ第四句の下へりつゝて意得べし。少くも爲便
 無らなくふゝて太甚すべなきよあり。○歌意ハ旅
 々と言の端よかけていふよはさのみむつゝのし事
 もあらずいとこの易きことなるら心中よハ妹を戀
 しく思いつゝ太甚く爲むすべなき事なるをとなり。
 十一 廿一 小言云者三三二田也醉四小九毛心中二我
 念羽奈九二とほる類なり。又此下 六 丁 小本二句ハ今
 と全同くして第三句以下異れる歌あり。又十卷 四 十 小
 風吹者黄葉散乍少雲吾松原清在莫國十八 一 三 十 小 可

久之天母安比見流毛能乎須久奈久母年月经禮婆
 古非之家禮夜母などほるみな同類のいひ様なり
 和伎毛故爾古布流爾安禮波
 多麻吉波流美自可伎伊能知
 毛乎之家久母奈思

古布流爾安禮波ハ戀る小吾者なり。戀る小有バとも
 聞ゆれどさよハ
 美自可伎伊能知毛ハ命の短き事もと云むの

如し○歌意ハ命むのり惜き物ハ世小又こぐいなき
ものふてハあれど吾妹子を戀しく思ふ心の苦き
餘りふ中々ふ死さらば安のりなむと思へバ命
の短からむことども吾ハさらふ惜からずとなり
ミギノトラマリ ヨ ウタハ イタリテタタエシ トコロニ ナカ トミノ アソ

右十四首至配所中臣朝臣

宅守作歌

ヤカ モリガヨメル ウタ
舊本よハ右十四首中臣朝臣宅
守とのみあり今ハ目錄小従つ

伊能知安良婆安布許登母安
良牟和我由惠爾波太奈於毛
比曾伊能知多爾敝波

ハタナオオモヒソ 波太奈於毛比曾ハハタナオモ將莫念いそあり波多ハハタそのもと
心子ガよ欲をす厭イトひ惡キラひてあることなれど外イよすべき
すぢなくて止コことなくするをいふ詞なり猶イ一キラ卷下
ふ委イ云り○歌意ハ物思イをすするハそのもと厭イトひ惡キラふ

ことなれど外ふすべきすぢなく止事なくして吾身の故に物思を爲賜ふならむこのみ物思を爲賜ふ事なれば互カタふ命カミごふならへてあるならば又あふこともあらむそとなぐさめていへるなり

比等能宇宇流田者宇惠麻佐
受伊麻左良爾久爾和可禮之
互安禮波伊可爾勢武

伊麻左良爾ハ尾句の上よりついで意得べし○久爾和可禮ハ國別よて國を隔て別るよくなり○歌意ハ世人皆の殖る田を人なみふ殖ましまさず國遠くこのれまして今更ふ吾ハ如何イカニのせむすべの志られずとな

和我屋度能麻都能葉見都都
安禮麻多無波夜可反里麻世

古非之柰奴刀爾。

古非之柰奴刀爾ハ戀死ぬ内ウチの意なり。十卷丁六小夜コヨ之不深刀爾とある處ノフケヌトニ小既コニ具ツ云り。十九丁十四小左欲コサヨ布氣奴刀爾フケヌトニ廿卷三十小和我コワガ可カ敝流刀ヘルトニ爾ニ繼體ニ天皇紀ニ歌ウタ小コ于マ魔伊マ彌イ矢度ヤシト爾ニなどあるも皆同ニト○歌意ハ吾カ庭の松葉見つゝその待マツといふ名をこのみて吾ハ待つゝ居むと吾戀死ウカ小死ぬ内ウチ小罪赦ユルされて早く歸り來賜へとなり

比等久爾波須美安之等曾伊
布須牟也氣久波也可反里萬
世古非之柰奴刀爾。

比等久爾ハ他國ヒトクニなり。十二丁八小他國ヒトクニ爾ニ結婚ヨバヒニ爾ニ行ユキテ而云ニ云○須牟也氣久ハ急スマヤカなり。六卷三十小急スマヤカ令變賜根カヘレタマフ三代實錄十三詔スマヤカニツミナヘ小早爾コサヤカ罪那倍不賜ツミナヘタマハズヤケこれら急ク早スハヤカムムど訓ベ字鏡ニ小俗コ悠須牟也スマヤカ介志ケシとありスふハ後ノチなるベきナリ

本居氏云此須牟也氣久の須牟ハ進む意にて夜氣
久ハ附こる辭なり○歌意ハ他國ハ住惡スミアヒとそいふな
る吾戀死小死ぬ内よ急速スベキに歸り來賜へとなり急スベキと
云て波也ハヤと疊ね云るハ豫魚アラカシ而など云る類なり

比等久爾爾伎美乎伊麻勢豆。
伊都麻豆可安我故非乎良牟。
等伎乃之良奈久。

伊麻勢豆ハ令座イマセテ而なりおえーまさーめての意なり
○歌意ハ他國ハ遠く君をおえーまさーめていつハ
歸り來まさむといふかぎりをも知ぬ事なるをいつ
までかやり小戀コイしく思いつ、吾待居マツルむ事そとなり

安米都知乃曾許比能宇良爾。
安我其等久伎美爾故布良牟。
比等波左禰安良自。

曾許比能宇良爾ハ底方之裏爾なり曾許比ハ曾久敵
 曾伎敵など云ると同言ふて畢竟ハ底といふは異お
 らず曾久敵ハ三卷四十六丁小見底ハ上小まれ下よ
 まれ堅よも横よも行至極る處をいふ言なり千載集
 三卷小郭公猶初聲を忍山夕居雲の曾許よ鳴なり笠
 超を夕越來れば郭公麓の雲の曾許小鳴なり源氏玉
 鬘小物の色ハ限あり人の容ハカタチおくれゝるも又曾許
 比あるものをとて云々胡蝶小限なり曾許比あらぬ
 志なれど人のとむべきさまもあらぬなどあ
 るも皆行至極れる處を云るふて思べし○左禰安良

自ハ信不有なり左禰ハ信といふも同ト七卷三十一
 信有得哉戀敷鬼乎九卷三十一小核不所忘面影思天十
 四丁小安志可流登我毛左禰見延奈久爾此下三十一
 夜須久奴流欲波佐禰奈伎母能乎十八三十一與之母
 佐禰奈之廿卷十二小登伎波佐禰奈之など多し○歌
 意ハ天地の間の行至極る限尋ぬとも吾如く君を戀
 しく思ふらむ人ハまこと
 小二人といあらざとなり
 之呂多倍能安我之多其呂母

宇思奈波受毛豆禮和我世故。

多太爾安布麻低爾。

安我之多其呂母其呂母類聚抄ハ娘子が吾下衣小て
下下著褻褻衣衣ををいいふふ○毛豆禮毛豆禮ハ持ておれの意なり
○歌意ハ吾吾の下下著褻褻衣衣をを失失ええずず直直小小相見相見むむまま
でで吾吾形見形見小小持持ここままへへととなりなり下衣下衣ハハ即即娘子娘子のの形見形見小小
贈贈れれるる衣衣よよてて上上小小和伎毛和伎毛故故我我可可多多美美能能許許呂呂毛毛とと宅宅
守守のの云云るる即即其其なりなり次次のの縫縫るる衣衣そそととああるるももおおなないいどど

波流乃日能宇良我奈之伎爾。

於久禮為豆君爾古非都都宇

都之家米也母。

宇都之家米也母ハ顯顯くく有有めめややハハのの意意よよてて母母ハハ歎歎
息息辭辭なりなり○歌意ハ花鳥花鳥の色色音音ををたたどどめめてて物物毎毎小小心心
愛愛憐憐くく思思ををるる春春日日ああれればばあありりくく如如くく君君とと共共よよ
居居ババいいのの小小樂樂くくののららむむとと思思ふふよよかかくく君君小小遺遺さされれ居居

て獨居ればいよ〜戀〜思はれてさ
ても顯々〜き心のさるふな〜となり

安波牟日能可多美爾世與等。

多和也女能於毛比美多禮豆。

奴敝流許呂母曾。

許呂母類聚抄よハ衣と作り〇歌意ハ又逢む日まで
の形見よせよとて手弱女の心弱く思ひ亂れて縫て

進らする衣そ。

此あるとなり

右九首。娘子留京悲傷作歌

舊本よハ右九首娘子との

みりり今ハ目錄よ從つ

過所柰之爾世伎等婢古由流。

保等登藝須多我子爾毛夜麻

受可欲波牟。

過所ハ公式令關市令等小見えこり。又延喜雜式小見ゆ。今俗云切手なり。釋名小過所至關津以示也。或云傳過也。移所_ヲ在識_ヲ以為信。東鑑よハ過書と書り。又朝野羣載小過所牒見えこり。さてこハフタと訓べ。和名抄小野王案簡所_ヲ以寫書記_ス者也。兼名苑云牘一名簡札也。和名不美太。まの文字集畧云籍民戸之書古以牒。今黃帝野王案凡書於簡札皆謂之籍也。和名與簡札同。など見えて。布美多ハ書版の義よて簡札の類を總

いふ稱と見えて。過所も其類の中の一なれば。あゝの訓べきあり。さて不美多を不多といふハ筆をも。彼抄よ。さて不美多とあるを布天とのみもいふ。如し。さて不美多天など云て美をいふ。さるハ後の支のやりなれども。あゝのらず。は彼抄よ。彌和名由美波數。まの附和名由美都。かと何るを此集よハこと。とく由波受由豆可と見えこるをも。思べ。○多我子爾毛ハ岡部氏多ハ和子ハ未の誤。さて爾毛の下。我毛の二字を脱せよて。ワガニモガモと訓べ。こ云り。○歌意ハ京よ歸行て。妹よ相見て來こく思へど。關所_{セキヤ}あれば。過所_{セキヤ}牒なくてハ。超往_カ事も協_{カチ}をす。されバ過所_{セキヤ}牒なし。關飛超る霍公鳥の吾身_{カミ}小てももの。あれ。の。さらば止ず往來_{カヨヒ}行て。妹小相見べき物をと

古今序
 秋成云。うらや
 みハ心病あり。
 心をうらと云
 ハ古言なり。め
 つるあまりふ
 心病ると云ふ
 り

なり。契沖此歌古今集序小鳥をうらやみと云ること
 るなりと云りまこと小然ることなり。廿卷四十下河
 佐奈佐奈安我流比婆理爾奈里豆之可美也古爾由伎
 豆波夜加弊里許牟これ又今の歌并彼序思合べ

宇流波之等。安我毛布伊毛乎。

山川乎。奈可爾敵奈里氏。夜須

家久毛奈之。

第一二句ハ上三十一下三十二小も同じく見えり。○山川乎ハ
 山と川とをなり。○奈可爾敵奈里氏ハ中間ナカラ隔てと
 云の如し。下三十三小山川乎奈可爾敵奈里豆等保久登
 母とよめりま三十四下三十五山河能弊奈里底安禮婆又
 廿六安之比紀能夜麻伎弊奈里底又三十六關左閉爾弊
 奈里底安禮許曾三十七下三十八石根踏重成山雖不有など
 も見えり。○歌意ハ愛カハと吾思ふ妹なるを山と川
 とを中間ナカラ隔てあふ事カタを協カタをねハ安き心もさらふ
 なりと

牟可比爲豆。一日毛於知受見。
之可杼母伊等波奴伊毛乎都。
奇和多流麻豆。

牟可比爲豆ハ四卷一丁小向座而雖見不飽吾妹子二
立離往六田付不知毛とよめり○都奇和多流麻豆也
一月を経るまでの意なり一年経るを年渡といふよ
同丁十三丁小年渡麻豆爾毛人者有云乎云々○歌

意ハ互は對ひ居て一日も漏ず相見かども飽厭る
る事のなき妹なるをかく相別れて一月を経度るま
で相見ずあれハ爲む方なく悲しとなり六帖ふ
向居て背く間だよ肝消て思ひ物をも月更る迄
安我未許曾世伎夜麻故要氏
許已爾安良米許已呂波伊毛
爾與里爾之母能乎。

世伎夜麻ハ關と山となり。關ハの山といふ關ハとハ砥波の關を云山とハ塩津山などを主と云るなるべし。○歌意ハ吾身ハ關と山とを起て此地よ遠く隔り居てこそあらめ妹よ親しく副タテい依リふし心ハ猶京よ留りてある物をととなり末句ハ十一丁ハ小紫之名高乃浦之靡藻之情者妹爾因西鬼乎とある小同ト

佐須太氣能大宮人者伊麻毛
可母比等奈夫理能未許能美

多流良武。

比等奈夫理ハ人騶ヒトナブリなり遊仙窟ヒトナブリ十娘笑曰莫相弄アヒナレとあり。○注よ一云伊麻左倍也とあり。第三句。○歌意ハ娘子の夏ナツより配ツキせられし吾なれば自ミの上やまゝに娘子のりへを殿上の若公達ハおもひろかりてくさぐさ騶ナブリりことを今やすするならむと思ひやるなり。岡部氏云殿上の若公達ハ人なぶりする事今昔物語ハ二つ三つ見えたり古へより有べしいとま有て思ふ夏ナツあき若公達集居て人ふあご名をつけその外ソノいる

いろとなぶりなぐさむ事。

おちくば物語ふもみゆ

多知可敞里。柰氣杼毛安禮波。

之流思柰美於毛比和夫禮豆。

奴流欲之曾於保伎。

多知可敞里ハ契沖ぶくりかへりなどいふ心なりかへすがへす物と思ておくなりと云るの如し之流

思柰美ハかい無故よといむの如し之流思ハ効驗

あり三卷三十小見知師無美又四十後雖悔驗將有八

方又六十雖戀効矣無跡四卷三十小雖嘆知師平无又

四十雖念知信裳无跡又四十後爾雖云驗將在八方十

八十小安須古要牟夜麻爾奈久等母之流思安良米夜

母垂仁天皇紀小有何益などあり益字を訓るるよく

之流思み又六卷十七小蟻通御覽母知師八卷十五小

欲見來之久毛知久又四十來之久毛知久相流君可聞

又四十情毛知久照月夜鴨十卷三十小來之雲知師逢

有久念者など活用しても多く云り〇歌意ハ幾度と

いふかぎりもなくくりかへ〜〜カミミナケ 哀泣どもその効シルシ
のなき故ふ一すぢみ思ひうんどて寝る夜そ多きと
な

左サ奴ヌ流ル欲ヨ波ハ於オ保ホ久ク安ア禮レ杼ド毛モ
母モ能ノ毛モ波ハ受ズ夜ヤ湏ス久ク奴ヌ流ル欲ヨ波ハ
佐サ禰子奈ナ伎キ母モ能ノ乎ラ

佐禰サミ奈伎ナキハ信シ小無コムと云イの如ニ

○歌意かくれこるすぢみ

與ヨ能ノ柰ナ可カ能ノ都ツ年子能ノ已コ等ト和ワ利リ
可カ久ク左サ麻マ爾ニ奈ナ里リ伎キ爾ニ家ケ良ラ之シ
須ス惠エ之シ多タ禰子可カ良ラ

第一二句ハおほよそ世間の常のことこりといふなり
○可久左麻爾ハ如此様よなり○須惠之多禰可良

ハ、居ス種カ故カなり。居スハ蔣カといふ小同ド。今俗ヨも、艸キ木の種ヲを蔣カと須ス惠エ流ルと云リ。さて多タ禰チハ、契キ冲ウのいひハ如ク業ノ因ヲを云フ。歌ノ意ハ今カくルことハあハふトおハほよそ世間ノの常理ヨて己ノ前世ハ蔣カ置キ業ノ因ヲ故カるらハとシ思ヒあキらハめスるヨりナり

和ワ伎ギ毛モ故コ爾ニ安ア布フ左サ可カ山ヤマ乎ヲ故コ
 要エ豆テ伎キ豆テ奈ナ伎キ都ツ都ラ乎レ禮ド杼ア安ア

布フ余ヨ思シ毛モ柰ナ之シ。

和ワ伎ギ毛モ故コ爾ニ逢フといひハかケる枕詞ナら此歌ハてハ猶カ歌ノ意ハも關れリ十五卷ノ小ハ吾ワ妹モ兒コ爾ニ相ア坂サ山ヤマ之ノ十三六小ハ未ラ通ト女メ等ラ爾ニ相ア坂サ山ヤマ丹ニ又ニ此上十二ノ小ハ和ワ伎ギ毛モ故コ爾ニ安ア波ハ治シ乃ハ之ノ麻マ波ハ十二三小ハ吾ワ妹モ兒コ爾ニ又ニ毛モ相ア海ハ之ノ十三六小ハ我ワ妹モ子コ爾ニ相ア海ハ之ノ海ハ之ノなどハ多クハ唯ア枕ノ詞ヲのみハて下ヨを關からズ○歌ノ意ハ吾ワ妹モ子コ小ハ逢フといふ名ノ逢フ坂ヲ山ヲを越テ來ツれば若シや逢フ事ハあラむト戀シく思ヒつテ泣キをれト逢フ坂トいふハ

唯山名むのりふて逢ふ

しもさらよなりとなり

多^タ婢^ビ等^ト伊^イ倍^ハ婆^バ許^コ登^ト爾^ニ曾^ソ夜^ヤ須^ス

伎^キ須^ス敝^ベ毛^モ奈^ナ久^ク久^ク流^ル思^シ伎^キ多^タ婢^ビ

毛^モ許^コ等^ラ爾^ニ麻^マ左^サ米^メ也^ヤ母^モ

第一二句ハ上よもあり此第二句下よ志のハ有ども
といふ一句をのりそめおくらへて聞べしと契冲の

云るそよき〇歌意ハ旅々と言の端よかけて云よ
さのみむつの一き事もあらずいとハ易き事をの
ら實^{マコト}ハ爲むすべもなく苦き旅ふてあるなりさ
て志の苦き旅ふてハあれども娘子の留居て手弱
女心の一道ふ思ひむすばれて歎くふらまさらどと
ありつねよる人のおもひをバ淺をのなること小
いなしてこのおもひのまさるよとこそよむをこ
このそれとハかへさまふてかくよめるは男女の愛
情の深くて女のすべならむことを強ずて信小思
ひやりいとほしみてよめるなり四卷^{廿九}小坂上家

大娘報家持歌。大夫毛如此戀家流乎。幼婦之戀情。爾比有目八方とある。その歌の意なる妹のこゝろをえをうけいきてよ

めるやりなり

山川乎。奈可爾。敝柰里豆等保。久登母許己。呂乎知可久於毛。保世和伎母。

第一二句ハ上亦も見えしりの歌意ハ山と川とを中間ハ隔置て身こそ遠く離れてありとも心をのりをバ間近くおほしめ

せ吾妹子よとなり

麻蘇可我美可氣豆之奴敝等。麻都里太須可多美乃母能乎。比等爾之賣須奈。

高光集
 高きよの衛
 門督こそあつ
 てまこ給ふ
 小
 してまらず
 と云詞有
 見えり
 猶考へ

可氣豆之奴敵等ハ心小のけて吾を思へとてあり鏡
 懸て吾を慕へとてと打つけお云るおさて鏡ハ鏡臺
 ハ非ず主とハ心おのけてと云なり。さて鏡ハ鏡臺
 おかくる物なる故よ可氣豆といをむ縁よまづ初真
 十鏡と云るのみなりかくてこを契沖のいひごと
 くずおハち鏡をふかさみよおくりけるふよりてか
 くハよめるの又他物を寄物おおくれるふてもある
 べいいづれよしても真十鏡といへる。○麻都里太須
 ハ三代實録宣命ふ多く奉出と見えさるそれよ同じ
 この奉出を本よイダシマツルとよめるハ非な。○比
 等爾之賣須奈ハ莫示人なり。○歌意ハ心小のけて吾

宇流波之等。於毛比之於毛波
 婆之多婢毛爾。由比都氣毛知
 豆。夜麻受之努波世。

波婆舊本顛倒○歌意ハ一すぢお吾を愛りと深く思
 へ。此形見の物を下紐小結著持てかりお身を離

さず常ふ止ず吾を思ひ賜へとなり契冲云これハ
鏡の外これハ前の歌なる形見の
物を鏡と定めての詠なり。のよみなり

右十三首在配所中臣朝臣

宅守贈歌

舊本よむ右十三首中臣

朝臣宅守とのみあり

多麻之比波安之多由布敝爾

多麻布禮杼安我牟禰伊多之
古非能之氣吉爾

多麻之比波ハ魂タマシヒをバの意小見べーと源嚴水云り多
麻之比マシヒと云るハ四卷十九小もマシヒ媿孀等之珠タマシヒ篋有玉櫛
乃神家武毛魂タマシヒ消ケむ妹爾阿波受有者イモとあり○多麻布
禮杼ハ鎮魂祭の祈禱イをすれどもイの意なり鎮魂祭を
ミタマフリと云りとこれも同人説りイさもあるべー

○歌意ハ戀しく思ふ心のあげきふよりて魂もりの

れ出べけれハ朝となく夕となく鎮魂祭をして魂を
志づむれども猶驗シなくて吾胸痛く苦くして神魂
のうのれ出る
事止すと成り

己能許呂波君乎於毛布等須
敝毛奈伎古非能未之都都禰
能未之曾奈久。

古非能未之都都ハ戀耳爲乍なり○歌意ハ今日この
頃ハ君を戀しく思ふ心ハ切りて爲む方もなき思ひ
を一つハ一すがよ音

をのみを泣じなり

奴婆多麻乃欲流見之君乎安
久流安之多安波受麻爾之豆
伊麻曾久夜思吉。

安波受麻爾之豆ハ契沖云あえずしてなり麻ハ助辭
かりこりずといふをこりずまといふの如シ。岡部氏
受麻ハあえず妻といふべし朝づま夜ごもりハ安波
妻など妻をいふこと多しといへれどいハ歌意
ハさきよ事出来ぬ時よ夜のみあひて朝よ別れ去座
て逢ずて心だらひならざりしことのある
ず口惜くて今更よ悔しくおもふとなり

安治麻野爾屋梶禮流君我可
反里許武等伎能牟可倍乎伊

都等可麻多武

安治麻野ハ和名抄よ越前國今立郡味真阿知末と何
る處の野なり○等伎類聚抄よハ時と作り○歌意ハ
越前國味真野よ獨行暮て艱難して宿り賜ふらむ其
君の平安くて京よ歸りまゐる上り賜をむ其時よハ迎
出て歡しく相見むと思ふよ罪赦されて歸り賜をむ
時をいつをかざりと思ひての待つ居むそとなり

宮人能夜須伊毛禰受豆家布

家布等麻都良武毛能乎美要

奴君可聞

宮人ハ岡部氏宅守もと殿上人ならむ上よ人なぶり
上よていとあさりあり友
を宮人といふべいと云り
或説よ宮ハ家字の誤を
るべいと云りこれよ
○歌意ハ家人ハ今日
今日の夜も寐ずしてひさすらよ待らむ物をさても
歸り來賜えぬ君哉となり娘子ハ密婦よてもとより
その家の人よあらねバ家族の情をおもひやりてさ

て實よハ自のいこく慕

ふ心を思をせくるなり

可敞里家流比等伎多禮里等

伊比之可婆保等保登之爾吉

君香登於毛比豆

保等保登之爾吉ハ契冲欽明天皇紀よ是日天皇聞己
歡喜踊躍とあるを引てよろこぶ心なりと云り
字鏡

憂心也。保
 止波志留。本居氏ホトバシルハホト。として走
 を云なり。されバホトと云言あるなり。今俗はアアテ
 フタメクなど云フタも是あり。又フタ。とも云な
 り。されバ。ホト。フタ。と爲よけりなりと云り。今
 ホト。フタ。など。物の
 動くさまを云詞なるべし。大鏡五よひつものりちよ。
 物のほと。けりけるのあや。さよとあるも。同言
 の。歌意ハ歸りける人ハ宅守よあらず。誰その人の。
 赦免よ。いひてかへるよ。いふを風聞で。若ハ夫君よ
 てあらむのと思ひて。歡のあまりよ。
 胸のふ。と。あきよ。なり

君我牟多由可麻之毛能乎。於
 奈自許等。於久禮互乎禮杼與
 伎許等毛奈之。

於奈自許等ハ同事なり。許等ハ如罪よあひて配する
 るも罪なくて都よ留り居るも思とするハ同事とな
 り。さて同ハ古ハ多ハ於夜自と云り。集中志。此集よ於
 奈自云るハ唯。と十八。よ於奈自伎佐刀乎。

とあるのみなり。○歌意ハ契冲云。君と、もよなぶのさ
れてゆのまゝものとおくれて都よ残りをとれど物を
思ふことのおあづことよ
てよきこととあなくとあり。

ワガセコガカヘリキマサム
和我世故我可反里吉麻佐武。
トキノタメイノチノコサム
等伎能多米伊能知能已佐牟。
ワスレタマフナ
和須禮多麻布奈。

歌意かくれ
るすぢな

右八首娘子和贈歌

舊本よハ右八首娘子

作歌とあり今改つ

アラタママノトシノヲナガク
安良多麻能等之能乎奈我久。
アハガレドケシキコロヲ
安波射禮杼家之伎許已呂乎。

安我毛波奈久爾。

歌意ハ年月長く久しく相見ざれども妹を戀しく思ふ心ハさらよかいらぬ事なるをとなり上五よ波呂波呂爾於毛保由流可母之可禮杼毛異情乎安我毛波奈久爾十一六よ朱引秦不經雖寐異心我不念十四三丁よ可良許呂毛須蕪乃字知可倍安波禰杼毛家思吉己許呂乎安我毛波奈久爾

家布毛可母美也故奈里世婆。

見麻久保里爾之能御馬屋乃。刀爾多豆良麻之。

見麻久保里ハ娘子よ相見まく欲しての意なり○爾之能御馬屋ハ西之御廐よて右馬寮をいふべし○刀爾多豆良麻之ハ外よ立有まなり十四九よ爾保杼里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能可奈之伎乎刀爾多豆米也母○歌意ハあり一日の如く京よありせば妹よ相見まく欲して今日この頃ハ西の御廐の外

よ立ちまゝをこなり。これハ彼娘子の家。右馬寮の近
隣ツギヨあり。故寮の外ヨ立て。あいかしらいあれ。よ
よりて。かくよ

めるなるべし

ミギノフタウタハナカトミノアソミヤカモリガマタオクレル

右二首。中臣朝臣宅守更贈

歌ウタ

更贈歌の三字。舊本よ

ハナシ。目錄よ従つ

伎能布家布。伎美爾安波受豆。
須流須敝能。多度伎乎之良爾。
彌能未之曾柰久。

歌意ハ長き間ならず。唯昨日今日君ヨ別れて。逢ずし
て。便り寄。着べき爲方ヲ知ず。小居て。一すぢよ音を
の
みそ泣。かくてハ久しき年月を。堪て經べ
きよあらずといふ謂を。含め餘しり

シ
之。路。多。倍。乃。阿。我。許。呂。毛。豆。乎。
ト
登。里。母。知。豆。伊。波。敝。和。我。勢。古。
タ。ダ。ニ。ア。フ。マ。テ。ニ。
多。太。爾。安。布。末。低。爾。

歌意ハ復逢む日の形見より給へとてこの思亂て縫
て奉れる其衣と大切よ取持給いて直よあふまでよ。
よくして神祇カミタチに祈齋イハヒ
つゝまゝませとなり

右二首。娘子和贈歌

和贈歌の三字舊本よ

ハなし。目錄よ従つ

ワ
和。我。夜。度。乃。波。奈。多。知。婆。奈。波。
イ
伊。多。都。良。爾。知。利。可。須。具。良。牟。
ミ
見。流。比。等。奈。思。爾。

歌意ハ吾庭の橘花ハ見愛る人お

し。無用^{イタヅラ}ノ散失らむのとなり

古非之奈婆古非毛之禰等也。

保等登藝須毛能毛布等伎爾。

伎奈吉等余牟流。

歌意ハ霍公鳥の鳴を聞バあをれを催されていよい
よ戀しく思ふ心よ堪がこきをさる事よ心をせず

て來鳴響むるハ戀死よ死バ死なりともせよとの

こごよやとなり十一^四よ戀死戀死耶玉梓路行人事

告兼又^六戀死戀死

哉我妹吾家門過行

多婢爾之豆毛能毛布等吉爾。

保等登藝須毛等奈那難吉曾。

安我古非麻左流。

歌意ハ時もこそあれかやうよ旅よて物思をする時
 よさやうよむさく〜と鳴ことあわれ汝鳴聲を聞バ
 聞ごとよあをれを催モホされていよ〜吾妹を戀〜
 思ふ心の益るそとなりハ卷十四よ神奈備乃伊波瀬
 乃杜之喚子鳥
 痛莫鳴吾戀益

安麻其毛理毛能母布等伎爾
 保等登藝須和我須武佐刀爾

伎柰伎等余母須。

安麻其毛理ハハ卷十四よ雨隱情鬱悒出見者春日山
 者色付二家利とよめり〇歌意ハ〜さへあるよか
 やうよ配所のごび〜きうへよ雨よふり隠られてい
 ど物思をする時よ吾住里よ霍公鳥の心なく來鳴
 響めて思を益

多婢爾之豆伊毛爾古布禮婆。

保登等伎須和我須武佐刀爾。

許欲奈伎和多流。

許欲奈伎和多流ハ從此間鳴渡りて此間を鳴渡るといふも同ト集中は多きこととなりてこゝハ契沖の所もこそあるべきよの心なりと云ふの如し。歌意ハかやうよ旅よて物思をする時よ處もこそあるべきよ吾住里よ鳴渡りて霍公鳥のいよ〜吾よ物思を益らむとなり

許已呂奈伎登里爾曾安利家
流保登等藝須毛能毛布等伎
爾柰久倍吉毛能可。

歌意ハ物思をする時よ鳴べき物ハ鳴まじき事あるよかやうよ鳴て霍公鳥の吾よ物思を益らむるハさても心なき鳥よてそありけるとなり

保登等藝須安比太之麻思於
家柰我奈家婆安我毛布許已

呂。伊多母須敝柰之。

安比太之麻思於家ハ少の間よてもあひごをおきて
鳴さらばこの物思いの志むよても息むをの意な
り○伊多母須敝柰之ハ最も爲便無なり多き詞なり
既に云り○歌意ハ霍公鳥よ少の間よても間を置いて

鳴さらば吾物思の志むよても息むをよかやり小
間を置ず屢小鳴故よいよ〜あをれを催されて吾
戀しく思ふ心の最も爲方なりとなり契冲宅守の藏
部女を捨て此娘子をむのへられけるハ道は背ける
故よ流人となられけれどもよみのをされさるうこ
ハともよあをれなるものなりと云り按よ藏部女を
出捨よハあらずで本妻をばさておきてこの娘子
を娉て密に嫁けしなるべし右馬寮の外よ立て志の
いあひこり〜様も家よ迎へ娶よハあらずさるみ
ごりがた〜き事の露をれ〜よよりて流罪よあひけ

るなるべし。然れども、他妻を犯せし類ふあ
らざりければ、後よ罪赦されけるなるべし

ミギノナ、ウタハナカトミノアソ、こヤカモリガヨセハナ
右七首。中臣朝臣宅守寄花

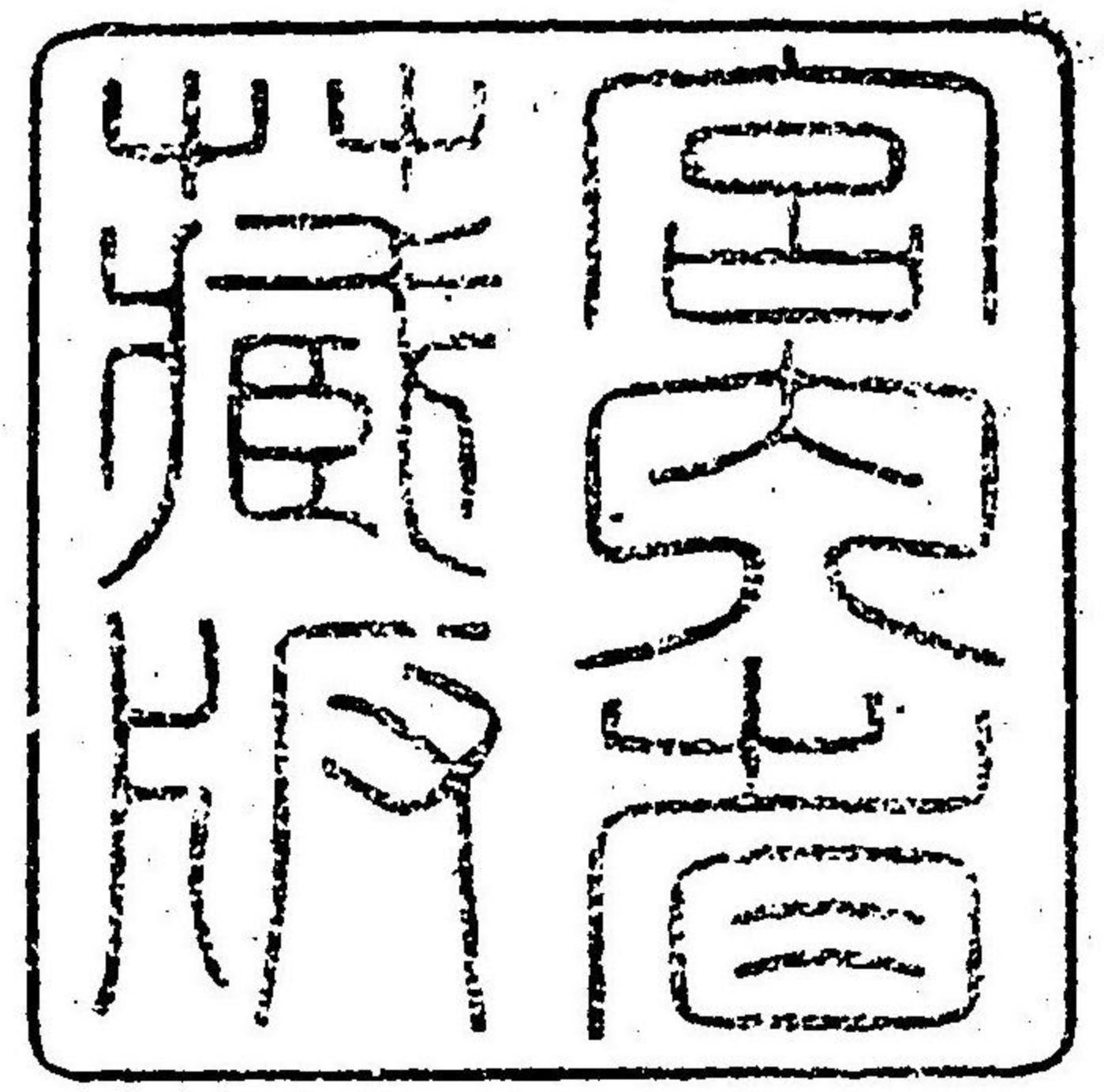
トリニムテオモヒラヨメルウタ
鳥陳思作歌

萬葉集卷第十五

明治二十四年十月三日出版

宮内省藏版

明治十七年十月
六日出版 屈



16
125
96

